

『視聴覚ライブラリー』1965年3月(発行元不明)

視聴覚教育の意義と現状

矢 口 新

I. 教育と視聴覚教材

1. 教育の意義を考え直す必要がある

(1)

教育という言葉を使うときわれわれは、それについての具体的な姿を思い浮かべることができる。無理に思い浮かべようとしなくともひとりで浮かんで来る。それ程われわれに親しいものになっているのである。その姿はどういう姿であろう。それは、おそらく或る教室の場面といったものであろう。一人の先生と多くの生徒とがいる教室、そこには机や腰掛があつて、先生は教壇の上に立ち、背後には黒板がある。生徒はきちんと机に向つて、先生の話をおとなしく聞いている。まあこういう姿であろう。それは教育が行なわれている姿である。

しかしこういう形の上で教育が行なわれていると考えるのは、本当は甘いのである。われわれは、こういう形を教育の場面だと考えるのは、もう日頃の事実のように思いがちである。あまりにきまったことで、それが教育だと思いこんでしまつて、少しも疑わないけれども、そこにいつの間にか、おとし穴におちいつてしまうのである。「授業あれども教育なし」という言葉がある。上にのべたような教育の場面はいいかえれば授業である。それは授業であるけれども教育ではないのではないか。

教育というのは、いうまでもなく生徒の方に成長がなければならない。のびて行くということがなくてはならない。のびて行くというのは一種の比喩である。むづかしい言葉でいえば学習ということである。この場合の学習というのは厳密な使い方をする。つまり経験による行動の変容という意味につかう。或ることを経験してその結果行動に変容がおこったとき、学習したという。この使い方は、通俗的な使い方とちがうことに注意してほしい。通俗的には、「生徒は今教室で学習している」などという。この時の学習は授業をうけているということである。それはある結果を予想している。つまり学習が成立することを予想して授業をうけ、ある活動をしている。そういう使い方は、結果としての学習という使い方とちがうのである。今はこういう通俗的な使い方をしない。

さて話を本題にもどして、教育というのは厳密な意味での学習が成立することをねらっている。そうすると、授業をしても学習が成立しない場合もあるのではないかという疑問が成立してもおかしくないであろう。現にいくら説明しても生徒はわからなかったという場合がある。これなど

は最もよい例である。

しかしそれは極端な場合である。実際に授業をおこなって学習が成立しないということはないであろう。すこしは何等かの学習が成立しているということができる。少くともわれわれはそう思っている。しかし、なおかつ今われわれの行なっている授業は学習を成立させるようになっていくかということを反省してみる必要がある。それは何故か。それにはまず学習の成立ということの具体的な姿を明らかにしなければならない。つぎにそのことについて考えてみることにする。

（２）学習が成立するとは何がどうなったことか

学習が成立するというのは行動が変容することであるといったが、その行動が変容することとはどういうことか。簡単な例をあげれば、今まで人に会って挨拶をしなかったが、先生におしえられて挨拶をするようになったとき、そこには変容が起ったと見るべきであろう。自分の前にいる人に対しての反応の仕方がかわったのである。ある具体の場、つまり自分の前に人がいるといった場で、そういう行動をとるのは、頭脳の働きであるが、その働き方がかわったわけである。頭脳が即座に判断をして、身体各部に指令を発して、挨拶というような行動が行なわれる。そこにはいろいろな頭脳の活動があるわけである。

さて挨拶をしない状態から、それができる状態になるには、どういう教育があるだろうか。「人に会ったら挨拶しなさい、わかったか」といえばそうなると考えているとしたら、それは甘いであろう。そんな言葉ではなかなか人の行動を変容させることはできないことは誰も知っている。もっともそれは生徒による。人に挨拶をする仕方を知らない子供、たとえば帽子をとって、どういう風におじぎをするのかやったことがない子供ならば、そういう動作をできるようにしてやらなくてはならない。人に会ったらといっても誰にでも挨拶するのでなく、知っている人に挨拶するのだということをおしえなくてはならぬ。そういうことをおしえても、知った人を見たらすぐ反射的に挨拶するようになるには練習が必要である。なかなかすぐにすらすらと行動できるようにはならないのである。一つ一つそういうことをできるようにしてやる必要があるのである。そういうことができる子供でも、人をみたらおじぎをしない子供がいるかも知れない。それはたとえば、はにかむというようなことが原因となっているのかも知れない。そういう子供には、自分を統制することができるような訓練をしなければならぬ。自分のはにかむ気持ちをコントロールするようにしなくてはならぬ。それもただ、はにかんではいけないなどというお説教ではだめであろう。自分を統制することができるように、いろいろな場において、それをやらせなくてはならない。

こうして学習が成立するのであって、それにはできないことをできるようにしてやる細かい段階が必要なのである。

（３）できるようにするということ

学習の成立ということとは、できないことができるようになることなのである。われわれの教育

の考え方では、教育の目標はわからせることだという考え方が強い。「わかったか」という言葉は教室でよくでる言葉である。教育するとはわからせること、学習が成立したということは、わかったことだと思いがちである。これは大へんなあやまりである。わかるという言葉ほどわからない言葉はないのである。「人にあったら挨拶をするのだよ」といえば「はい、わかりました」というかも知れない。しかしそれでもできはしないのである。

先生に話を聞いて、わかったという。しかしそれはわかったような気がしたにすぎないのである。そのしょうこに、先生が話をして、こんどはそれを生徒に言わせてみる。生徒はすらすらとは言えないのである。すらすらどころか、つかえつかえだと言ってはしない。つまり先生が頭で考えてしゃべるように、生徒は考えてしゃべることはできないのである。つまり先生のように頭脳は動かないのである。できないということである。それでは行動の変容になりはしない。わかったというのは、わかったような気がただけであって、先生のように考えることができるようになったわけではない。だから先生がわかりましたかなどと聞いて、生徒がわかったといたら教育の目標が達せられたと思うのは大へんなあやまりである。それでは生徒の行動を変容させることにはなっていないのである。つまり教育はわからせることだという文脈で考えるのは、まちがいなのである。できるようにする、行動ができるようにする、考えることができるようにするということが、教育のねらいでなくてはならない。

2. 能力を開発するための教育の構造

(1) 教材のあり方がかわらなくてはならぬ

これまでの教育では、わからせることを考えていたから、いな実は、わかったと思わせる教育をやっていたから、教育の場の構造は全体としてそういう文脈を柱としてつくられている。教材はわからせるための教材である。つまり書いてあることを生徒がわかったと思えばよい。教科書の著者は自分の思うことを書いている。わからせるようにやさしく書くという努力はする。それを生徒が読んでわかったと思えばよいのである。若しわからなければ、こんどは先生が説明する。これもわかるようにいうのである。そして生徒がわかったといえればよいのである。生徒はわかるように努力する。先生の説明を一生懸命聞く。わかればよいのである。実はわかったと思えばよいのである。できなくてもよいのである。そうすればあとは先生はわかったか、おぼえておけというし、生徒はわかりました、おぼえておきますといえればよい。しかしおぼえておくというがどうすればおぼえられるのか、少くとも、つもりだけではおぼえておくことはできないのである。

おぼえておくためには、くりかえし、その考え方をたどってみなくてはならない。そうすると、自分もそう考えることができるようになるのである。頭脳を訓練するのである。もっとも、わけのわからないことを門前の小僧のようにくりかえしても言葉だけはおぼえられるが、それでは、考えられるようになったとはいえない。自分にわかることをくりかえしてはじめて、そう考えることができるようになるのである。おぼえておくというのはこういうことをすることである。そして、この所が一ばん大切なところである。そう考えることができるようにつみあげていくこ

とが、教育の一番大切な仕事である。今の教育の構造はそこが一番よわくて、わかったと思わせるだけであとはほうり出している。つまり教育していない。教材も教科書も、みな教育をするようにできていないのである。

(2) プログラムをつくること。教育のプログラミング

視聴覚教材をつかう場合も、これまでの考え方では、本当に能力を開発するように、考え方を訓練するようにできていない。説明を聞いて、絵をみてわかったと思わせればよいという態度でつくられている。

教材は、行動できるように、考え方ができるようにするためのつみあげる教材でなければならないのである。一つ一つある行動ができるようにするために、頭脳を訓練する教材でなければならない。あることが考えられる、ある理論が使えるようにするためにつみあげる頭脳訓練教材でなければならない。能力を開発するということはそういうことなのである。能力を開発する教材は、頭脳訓練の教材でなければならない。

ピアノの教則本バイエルを思い起してみるとよい。はじめは親指と小指の動かし方からはじめて、次第にできるように訓練して行く。そこにはくりかえしが行なわれる。指が動くというけれども、それもつまりは頭脳が動くのである。それとおなじように、算数や数学の教科書の中にもくりかえし練習する問題が出ている。生徒はそれに向って頭脳を訓練する。やさしい所から次第にむづかしい所へと、つみあげて行くのである。そして一つ一つできるようになって、だんだんむづかしい計算もできるようになる。

社会科や理科の教科書は算数の教科書のように練習をするようになっていない。もっぱらわからせるようになっている。これはまちがっている。やはり社会や自然をどういう風に見るか、見方を訓練する練習をさせなくてはならないのである。そういうように教科書をつくり直さなくてはならぬ。

視聴覚教材もそういう考え方で全面的にくみ直されなくてはならぬ。子供が社会や自然をみるように、世の中の見方、自然の見方を訓練するための教材として、組み直されなくてはならないのである。

Ⅱ. 視聴覚教材の利用をダイナミックに

1. 教材の個別化の方向

考え方を訓練する教材、生徒ができるようにしてやる教材を考えてみると、それはこれまでの教材のように多くの生徒が一斉にみて、わかったと思うような教材ではなくなる。生徒ができるようになるために訓練をする教材は、一人一人がそれに対決して、そこで考えたり、行動したりしなくてはならぬ。つまり生徒のペースで教材が使われるようになる。そうなると、みんな一斉

に見たり聞いたりするのではなく、生徒一人一人があることをしなくてはならないわけである。自分で考えてみる、やってみることの練習をするのである。そうすると映画でも幻灯でもおおぜいでみる、そしてわかったと思うという体制で使うのではなく、一人一人が使う映写機・幻灯機になって、一人一人ですべてをみて、考え、作業しながら進んで行くことになる。

つまり視聴覚教具は個別化されて来るのである。最近の世界の情勢はそういう方向に進んでいる。個人用の映写機・幻灯機がつくられているのである。

個人用になると、小型の方がのぞましいことは論をまたない。8ミリの映写機がつかわれるようになるのは当然である。日本では8ミリとか16ミリとかでどちらがよいかなどというナンセンスな議論が横行しているが、使用する場がちがひ、使用の仕方がちがうのだから、平板な比較は意味をなさないことになる。

さらに個人個人が訓練教材を見ながら使うような映写機になると、逆まわしをしたり、途中でストップしたりすることができるのが望ましくなる。そういうくふうがどんどん進んでいるのが世界の情勢である。

さらにただ見るだけでなく、見たことに対して、ある作業をしたり、答を出したりしながら見て行くことになると、生徒の反応をさせる部分を設けているものが望ましくなる。その反応が正しいか、正しくないかを知らせる回答がついているならば最も望ましい。こういう風にしてやがて電子計算機と結びついて使用することを考える所まで進んで来ている。テレビ式に画面を提示し、それをみながら生徒が作業をして行く。それを電子頭脳がリードして行くという使い方もあるわけである。

2. 教育工学

視聴覚教育というと、映画とかテレビとかを見せる教育だというように考えられて来たが、教育の場の構造がすっかりかわって来た今では、あらゆる教育の場が、利用しうる限りの教材を利用しようとするようになって来ている。

つまり生徒にやらせ、考えさせるための場をつくるのが教師の大きな仕事になって来たのである。生徒に刺激を与え、考える材料を与え、考え方を指導するということになって来ると、あらゆるものを利用して行こうとするのである。あらゆる教育の場に、映画であろうが、テレビであろうが、スライドだろうが、テープレコーダーであろうが、その機能に応じて使用することを考えるのである。つまり教育の場のエンジニアリング（機械化）をすることになる。

こうなると視聴覚教育などということは意味をなさなくなる。教育全体が、教育工学的に構成されなくてはならなくなるわけである。そういう考え方から、教育のプラントつまり学校建築全体が大きな変ぼうをとげつつあるのが、最近の傾向である。円型の校舎が出来たり、八角形の校舎ができた、扇形の教室をつくったり、いろいろなものができている。扇形の教室だと、壁面を利用することができるので、都合がよいということもある。それは生徒にできるだけ様々な教材を提示しようとするためである。

おおぜいを相手にしてレクチャー（講義）をする場合でも、一人一人の机の前にテレビ式の教材提示器があつて、生徒は一人一人それをみながら話を聞く。さらに生徒の側から応答するアンサーバックシステム（応答の意味）があつて、教師の方にこちらの反応を知らせるように装置した講堂も次第にあらわれて来た。

こうして、視聴覚教育というのが、特別の視聴覚教室で、改まって、フィルムやスライドを見ることだというような考え方は次第に消滅しつつある。あらゆる教室が、あらゆる教材をフルに使用できるようになって行く。

視聴覚教育というのは、こうして構造的に変革をとげつつあるのである。

3. む す び

要するにこれからの生活で、教育ばかりでなく、物を考えたり、人と意見を交換したりするときには、さまざまな形式で視聴覚材料というものを使うことが一般化するであろう。現にテレビでも、さまざまな教材をさまざまな形式でわれわれの所へおくられて来る。とくに教育と意識しなくともよいわけである

ものを考えたり、人と話したりするときに、そういうリアルなものが必要なのである。つまり人間のコミュニケーションがこれまでよりもっと緊密になるということである。或はダイナミックになるということである。そういう地盤の上で、教育もダイナミックになることが要請されている。視聴覚教育というような教育が特殊なひびきをもったのは、映画やテレビやスライドが物珍しい時代のことである。21世紀の迫っている時代の教育は飛躍を必要とするのである。諸外国はその準備に大わらわである。われわれも眠っているわけにはゆかないのである。